JCAS次世代ワークショップ

交歓と境界

東ユーラシア、モンゴルとテュルクにおける宴会・酒・ことばをめぐって

2018年2月17日(土)　12:50～18:30

東京外国語大学　アジア・アフリカ言語文化研究所　大会議室(303)

プログラム

セッション１　現代モンゴル・テュルクの宴

寺尾　萌(首都大学東京大学院)
モンゴルの宴と交歓―婚姻儀礼における両家訪問を事例として

吉田世津子(四国学院大学)
「新しい時代」の宴―クルグズスタンの結婚披露宴に見る世代と変化

セッション２　宴にみえる文化的境界

伊賀上菜穂(中央大学)
ブリヤート共和国ロシア人古儀式派教徒の追善供養と酒

阿部朋恒(首都大学東京大学院)
中国雲南省のハニ族における儀礼と食の変容

セッション３　会話と境界

中村瑞希(筑波大学大学院)
日常と非日常をへだてる言語―ウズベク人社会における二言語使用を事例に

堀田あゆみ(学振特別研究員PD)
“歓待”の舞台装置としてのゲル―モンゴル遊牧社会における他家訪問の事例から

コメンテーター

風戸真理(北星学園大学)
三浦哲也(育英短期大学)
櫻間　瑛(学振特別研究員PD)

共催

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
地域研究コンソーシアム(JCAS)

アドバイザー

風戸真理(北星学園大学)

お問い合わせ

寺尾　萌
teraomoe[a]live.jp　[a]を@にご変換ください

詳細はAA研のウェブをごらんください

趣旨

本企画は、東ユーラシアの宴に表出する、かれらの社会的文化的特徴を、大国ロシア・中国に挟まれた地理的・文化的な位置づけや、ホストとゲストの間のトランズアクションを手がかりとしながら検討するものである。

饗宴は、贈与交換による社会的競合や調和を表現するフィールドとして、諸地域において象徴的な意味をもっている。寛大さとそれを示す態度の競争は、社会的秩序の維持に必要であった。儀礼としての饗宴そのものをめぐっては、そのリミナリティをめぐる社会文化的意味、所与の文化を象徴する宴の空間、食事や酒のシェアリングによる社会的紐帯の形成、強化といった機能が指摘されてきた。

本企画は、新たに「歓待」および「境界」という概念に注目することにより、東ユーラシアの宴に関する理解を、個別でありながらも、普遍性をもった議論へと接近させたい。すなわち、宴を自己と他者とが出会い、両者のさまざまなトランズアクションを経て相互の分離／接合が現れる契機としてとらえ、そこから諸地域社会における社会性の所在を探求する。ここにおいて、「歓待（hospitality）」は、そのことばが喚起する第一義的な理解にとどまらない意味をもつ。それは、単にホストから招かれたゲストへのもてなしではなく、招かれざる客、よそ者、あるいは敵といった、さまざまな他者との間に生起する交渉、トランズアクション、すなわち「交歓（fraternization）」といいうるのではないか。

遊牧という生業に根差すテュルク、モンゴルにおいて、社会は人びとが離合集散するなかで成り立っているため、接客の場はしばしば一回的かつ瞬発的に他者と関わる場となる。彼らのふるまいはだからこそ、瞬時にホスト―ゲストとしての自己を表現する手段と身構えを帯びているように感じられる。本企画では、その手段を「交歓」と仮に定義し、諸地域の報告から様々な境界を含む交渉のフィールドとしての宴会、共食、そして日常的な社会生活のあり方を検討する。